

## 特集にあたって

三好 章

『紀要』146号では、2012年から14年までの3年間に行ってきた愛知大学国際問題研究所プロジェクト「対日協力政権とその周辺」の成果の一部を公表する。

本プロジェクトは、以下のような趣旨で始められた。

「対日協力政権に関する研究は近年進展しており、……このたびの企画では、これをさらに進め、アジア太平洋地域での対日協力政権の実態とそれに関わった人々、社会の有り様を一次史料に基づいて検討し、同様に研究が進展しつつあるヨーロッパにおける対独協力政権の研究を視野に入れつつ、戦後の各地域との関わりを含めて、検討する。これによって、20世紀アジア太平洋史の新たな視角を見出すことを最終的な目的とする。」

すでに、1990年代、冷戦構造が崩壊するなか、歴史研究に関してもイデオロギーに寄りかかって判断停止に陥ったままで良しとする没主体的な研究は当然のごとく捨て去られ、史実に立ち返り、原典史料を読み直し、新たな史実を発掘しつつ、既知とされてきた事実を再確認、再検証する作業が地道に繰り返されるようになった。これは、日中戦争時期に関しても例外ではない。すでに、中国共産党を中心に「抗日戦争」が展開され、「抗日根拠地」において「新民主主義社会」のひな形が誕生し、「抗日民族統一戦線」は「国民党」が「反共高潮」によって破壊した、などの歴史観は、陳腐化しただけでなく、その虚偽性が明らかになってきている。そうした、一時期を風靡していた「正統史観」は、勝者であり新たな統治者となった中国共産党の正統性の根拠であったし、現在も基本的には変わっていない。しかし、「社会主義の輝かしき未来」が画餅に過ぎないことが露

呈してしまった現在、中国共産党が唯一頼りとする「国民」統合イデオロギーは、幻の「中華民族」によって組織された「中華ナショナリズム」以外には、もはやあり得ない。従って、汪政権などに対する「傀儡」「漢奸」などの「評価」は、これまで同様、永遠に変えようがないものとされる。研究に際しても、まず初めから大きな籠がはまっているのである。そのため、最近の大陸中国の研究では、詳細な地域社会研究の中に新たな動向を見出し、基層政権レベルでの「傀儡」「漢奸」の実相を描き出そうとしている。とはいえ、大陸中国以外の地での日中戦争研究では、すでに従来の「正統史観」に立脚していた評価への問い直しは常識化している。これは、欧米ばかりではなく日本も例外ではない。

そうした研究の潮流のなかで、日本が関わった汪兆銘政権、満洲国、蒙疆政権、植民地朝鮮、植民地台湾、さらに南方軍政下の東南アジアなどをひとまとめに考えるような乱暴なやり方は、もはや消滅していると言ってよい。眼をヨーロッパに転ずれば、1980年代以降、フランスのヴィシー政権研究が深化するなか、第5共和政のみならず、戦後のフランスに根強かった「レジスタンス神話」も崩壊した。同様にソ連崩壊後には、東部戦線においてナチの軍服を着た反ソ連派ロシア人がスターリンと戦ったこと、国を奪われたバルト三国の人々がナチに協力するなど屈折した動きを示したことなどが明らかになってきたが、これらもまた通り一遍の理解で済む話でないことは明白であろう。

こうした歴史の再検討が進むなか行われた本プロジェクトでは、当然のことながら、単純な「傀儡」「偽」「漢奸」という、イデオロギー先行の、そして政治的価値判断に従った言葉を用いることなく、出来るだけ価値中立的に歴史事象を扱うために、「対日協力政権」という言葉を用いた。もちろん、従来の意味通りの「傀儡」「漢奸」という言葉で表現されねばならない歴史事象があったことは否定しない。とはいえ、こうした言葉を使うことで類型的な整理を行ってしまうと、その地で生活していた人々の日常生活だけでなく、時に利害と打算もあったことは確実であるが、政権に関わった人々の思いを理解することは不可能である。そして、歴史を構築してきた生身の人間の活動を見て行く際に、より大切なものが抜け落ちてしまう危険性の方が高い。本プロジェクトで取り上げた水野梅曉や藤井草

宣の事跡も、固いイデオロギッシュな研究からすれば「日本帝国主義の侵略の道具」で片付けられかねない。朝鮮半島における「親日派」の動きも同様である。それゆえ、「対日協力政権」そのもの、そこに様々な形で関わった人々の理念と実際、それらを取り巻く文化的諸状況など、マクロ・ミクロ両面から対日協力政権の考察を試みた。検討の対象も中国に限らず植民地朝鮮・タイ・モンゴルへも拡大した。それらによって、研究の脱イデオロギー化を深めるだけでなく、対日協力政権の相互比較、各地域の実情を整理し、それによって全体的な20世紀史に連続できるのではないだろうか。

『紀要』146号には、昨年行った公開シンポジウムでの報告を中心に、2013年2月のワークショップの記録、さらに豊橋浄圓寺・飯能鳥居観音での所蔵資料調査の状況を掲載した。なお、水野梅曉・藤井草宣に関してはその活動の示す写真が数多く存在しており、それらは写真集として刊行予定である。また、本プロジェクトに関わった論考は、『論集 対日協力政権とその周辺』（仮題）として刊行する予定である。

以下に、本プロジェクトがこれまで行ったワークショップ、公開シンポジウムのプログラムを再掲する。

2013年2月21日：浄圓寺・鳥居観音史料から見る近代日中関係（ワークショップ）

1. 藤井草宣・水野梅曉について ……藤井宣丸（浄圓寺・草宣子息）
2. 浄圓寺史料と近現代中国社会史研究 ……佐藤仁史（一橋大学）
3. 日中戦争に関する浄圓寺史料について  
……広中一成（三重大学・愛知大学）
4. 藤井草宣と水野梅曉関係書簡について ……宮原佳昭（南山大学）
5. 浄圓寺資料のデジタル化  
……佃隆一郎（愛知大学東亜同文書院センター）  
曉敏（愛知大学三遠南信地域連携センター）
6. 浄圓寺資料の整理について ……野口 武（愛知大学大学院）

7. 鳥居観音所蔵資料 ……藤谷浩悦 (東京女学館大学)  
川口泰斗 (鳥居観音職員)

2013年11月16日：汪兆銘政権とその周辺 (ワークショップ)

1. 1942年5月：汪兆銘の満洲訪問——邦字紙の伝えたもの  
……三好 章 (愛知大学)
2. 汪精衛政権による政策展開——水利政策の分析を中心に  
……小笠原 強 (専修大学)
3. 蒙疆政権遺構の現況 ……広中一成 (三重大学・愛知大学)
4. 日中開戦直後の中国の将来構想——張鳴の「大漢国」の議論を巡って  
……関 智英 (明治大学)

2014年11月22日：対日協力政権とその周辺 (公開シンポジウム)

1. 1930年代日本の中国進出と日本仏教——水野梅暁を例に  
……広中一成 (三重大学)
2. 『畑俊六日誌』に見る汪兆銘政権 ……小笠原 強 (専修大学)
3. 植民地期朝鮮における親日派の民族運動  
——朴勝彬の自治・文化運動を中心に ……三ツ井 崇 (東京大学)
4. 維新政府の対日交流——赴日教育視察団の見たもの  
……三好 章 (愛知大学)